慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アナール学派の家族史研究 : 家族社会学の発展のために
Sub Title	Etude sur l'histoire de la famille dans les Annales : en vue du développement de la sociologie de la famille
Author	岡田, あおい(Okada, Aoi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1990
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.30 (1990.) ,p.53- 61
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000030-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

《アナール》学派の家族史研究

——家族社会学の発展のために——

Etude sur l'histoire de la famille dans les Annales

—En vue du développement de la sociologie de la famille—

岡　田　あ　お　い
Aoi Okada

Depuis une trentaine d'années que les Annales constituant un groupe d'études sur l' Histoire de France s'occupent des études sur l'histoire de la famille, celles-ci font des progrès considérables. Il s'ensuit que les résultats de ces études en viennent à renverser les théories déjà établies et, partant, des problèmes doivent se poser en ce qui concerne la sociologie de la famille. La rédaction de ce mémoire-ci a pour but d'abord d'élucider le point de vue et la méthode analytique de l'histoire de la famille par rapport au « Cambridge group for the History of Population and Social Structure » qui étudie l'histoire de la famille au point de vue de la démographie historique et ensuite de discuter quels vont être les nouveaux thémes donnés à la sociologie de la famille.

Or, les Annales ne forment pas une école complète dans le sens strict du mot et les formes en sont même ambiguës. En partant des Annales, nom générique désignant un ensemble d'investigateurs qui partagent l'opinion de la revue scientifique « Annales d'histoire économique » publiée par Lucien Febvre et Marc Bloch en 1929, ce memoire-ci vise à mettre au point le groupe qui étudie l'histoire de la famille.

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 《アナール》学派の家族史研究の視点
Ⅲ. 家族史研究の資料と分析方法
Ⅳ. 家族変動論の意義と限界
Ⅴ. 結びにかえて

Ⅰ. は　じ　め　に

フランス歴史学の一研究グループである《アナール》学派が家族史研究に着手してから，約 30 年がたとうとしている。この間に家族史研究は急速な発展を遂げ，その諸成果は，結果的に既存研究に対する反証の蓄積となり，家族社会学にいくつかの問題提起をすることとなった。現在，家族社会学の研究者は自明としてきた定義や類型に対して修正を迫られ，大きな衝撃を受けている。一例をあげよう。日本の家族社会学では，家族の普遍的な定義をめぐる長期に及ぶ論争の末，森岡清美の「家族とは，夫婦・親子・きょうだいなどの少数の近親者を主要な成員とし，成員相互の深い感情的包絡で結ばれた，第一次的な福祉追求の集団である」という定義が，代表的な定義として定着している[1]。この定義は，Ph. アリエスの独自な資料分析による以下の論証によって近代家族の定義に限定されるのではないか，という批判にさらされ，その正当性に疑問が投げかけられている。アリエスによれば，中世から近世初頭には「家族は生命と財産，そして姓名を伝えるというように，一つの機能を果たしていたが，意識・感情にまでは深く入りこんでいなかった[2]。」しかし，近代の家族は，「親密さとアイデンティティの欲求に対応している。家族の成員たちは，感情や慣れや生活様式によって結ばれている[3]」というのである。従って，アリエスに準拠するならば，「深い感情的包絡」という観念は，近代家族の特徴にしか過ぎなく

なるのである。

《アナール》学派による過去の家族の諸相の解明によって，家族社会学はこれまで行なってきたような家族に関わる歴史的事象を一挙に解明しうるような普遍的概念はありえないことを認識するよう迫られ，さらにその研究領域を近代以降に狭められつつある。家族社会学は，やすやすと過去の歴史を放棄してよいのだろうか。確かに，社会学は，A．コント以来，近代社会の構造やこれを支える人間を対象としてきた。社会学は歴史学ではないから，タイム・スパンを長く取る必要はないという議論がありうる。しかし，現在は，過去との比較によってはじめて明らかになるのである。

本稿は，《アナール》学派の家族史研究の視点ならびに分析方法を明らかにし，既存研究に対していかなる問題提起をしているのか，これを受けて家族社会学はいかなる点を修正し，発展していくべきなのかを論じることを目的とする。《アナール》学派の家族史研究は，家族社会学に大きな波紋を投げかけているにもかかわらず，体系だてて整理されないまま現在に至っている。その理由は，短期間に多くの業績が蓄積されたことに加えて，この学派の基本的性格，すなわち一貫した研究対象や研究方法をもたないという性格のために，研究者がそれぞれ独自の視点から家族にアプローチしていることに起因するようにみえる。《アナール》学派は，厳密な意味での学派を形成しているわけではなく，定量的データに基づく数量史を重視する研究者や，定性的データに基づく“心性 (mentalités)”史を重視する研究者が混在している。ここでは，L．フェーヴルと M．ブロックによって，1929年に発行された学術誌“Annales d'histoire économique et sociale”(1946 年“Annales, Ecnomies, Sociétés, Civilisations”に改称）のめざすところに共鳴を覚えてそこに活動の場を据えている研究グループを《アナール》学派と総称し，そのなかで家族史を研究するグループに焦点をあてることにする。さらに，《アナール》学派の家族史研究の特徴を明らかにするにあたって，必要な限りで，現在，家族史研究の勢力を《アナール》学派と二分している「人口史・社会構造史に関するケンブリッジ・グループ[4]」(以下，ケンブリッジ・グループと略す）の研究と比較しながら論じたい。

II. 《アナール》学派の家族史研究の視点

まず，《アナール》学派とケンブリッジ・グループの基本的立場，すなわち，どの階層の家族を対象とし，それをどのように研究しようとしているのか，ということから検討をはじめよう。《アナール》学派の創始者フェーヴルは，「新しい歴史学」を，「過去の人々を，彼らが次々と地上に作り上げた極めて多様だが比較可能な諸社会の枠の中に時間的に位置づけたうえで，彼らの様々な活動と創造を対象にして科学的に行なう研究[5]」と定義し，19 世紀以来の政治史・外交史中心の歴史学に代えて，人間諸科学と提携した全体史あるいは社会史としての歴史学をうちたてることを主張した。E．ショーターも，『近代家族の形成』で，「われわれの望みは〈上流社会〉よりもむしろ，庶民階級の歴史的経験を明らかにすることである[6]」と述べている。一方，ケンブリッジ・グループの基本的立場は，出来事・事件のレベルで歴史を捉える，出来事史ではなく，「社会の構造変化を記述し，解明すること[7]」である。つまり，「もっぱら特定の階級の勃興を中心とし，激変，危機，革命などを主題とする歴史解釈[3]」してきた従来の歴史学を批判し，研究の対象を一握りのエリート層から一般の人々へと移行させ，さらに，「拡大家族から核家族へ」というような科学的分析を欠いた家族論を展開してきた社会学を批判し，統計的分析に基づいて人々の行動や社会構造を解明する歴史学，P．ラスレットの言葉を借りれば「歴史社会学[8]」を構築すること，これがケンブリッジ・グループの基本的立場といえよう。《アナール》学派とケンブリッジ・グループには，従来の歴史学では脇役としてすら登場しなかった過去の民衆を主役にすえ，彼らの日常生活を解明しようとするという共通の基本的立場が見いだせるのである。

では，《アナール》学派とケンブリッジ・グループは，いかなる視点から家族を捉えようとしているのであろうか。日常生活の解明のために，《アナール》学派は「隣接諸科学との協同[10]」という方法をとる。家族史研究についても，ケンブリッジ・グループの視点を取り入れた歴史人口学的研究はもちろんのこと，歴史人類学的視点からの研究，民族学的視点からの研究，あるいはこれらの視点を統合しようという試みなど多種多様のアプローチがとられている。従って，その内容も，家族と社会との関わり，家族構造，家族制度，夫婦の役割，女性の地位，親子関係，夫婦間の愛情の問題，など多様である。それゆえ，一見，《アナール》学派に共通する視点などないように見えるが，共通する独特な視点が見いだせないわけではない。それは，アリエスが，「実体としての家族ではなくて理念としての家族[11]」を捉えようとした，この試みの継承である。つまり，家族史を正しく理解するためには，家族構造の安定性や変化ばかりではな

く，その意味上の諸変化に主要な関心を払うことが必要だとする立場をとることである。過去の人々の「家族観」がどのようなものであったのか，あるいはいかにこの「家族観」は変化したのか，変化しなかったのかを解明しようとする努力がなされたのである。アリエスは，フェーヴルとブロックとそれ以後の《アナール》学派の研究者の業績[12]から，心性の歴史的分析方法を継承し，家族を“心性”の歴史の対象とした。この「家族観」あるいは「理念としての家族」という“心性”の追求は，アリエスの研究をそのままの形で継承したショーター，L．ストーンの諸研究にはもちろんのこと，M．セガレーヌ，J-L．フランドラン，E．ル=ロワ=ラデュリ，A．ビュルギエール[13]など多くの研究者の視点となっている。

いくつか具体的な例をあげて，《アナール》学派の家族史研究者の視点を検討しておこう。ショーターは，『近代家族の形成』で，「家族史の核心はまさにこの（日常世界に住む多くの男女がいだいていた）感情の年代史をつづることであろう」と述べ，「そして今日の家族の危機が情緒～愛着と拒絶～の面での危機であることを考えれば，感情の歴史をたどることは家族史家の果たすべき責務なのである[14]」と続けている。ショーターは，「近代家族」の愛情生活に関する人間の“心性”の変化をこの著作の主題とし，愛情生活を構成している重要な要素として，ロマンティク・ラブ，母性愛，家庭愛を設定し，これらの要素すべてが近代の産物であり，伝統社会の一般の人々の間にはみられないことを実証した。さらに，E．バタンテールは，『プラス・ラブ－母性本能とう神話の終焉』で，「母性感情は本能ほど機械的でも無意識でもないように見える。」「母性愛は人間的感情に他ならない。」さらに，「母親の態度の変遷を観察すると，子供にたいする感情や献身があらわれたり，あらわれなかったりすることが，また，愛情がある場合とない場合があることが，みとめられる」と述べ，この著作が「母性のさまざまな形態の探求」にあることを明記している[15]。バタンテールは，フランスを中心としたヨーロッパの母性愛の歴史を分析し，母性愛が女性の自然的な本能の一部であり，神聖な本能であるというのは近代以降形づくられた神話にすぎないことを証明したのであろう。セガレーヌは，『妻と夫の社会史』で，過去の農村社会の夫婦の役割関係を日常生活の諸場面から取り出し，相手をどのように認識していたかを解明した[16]。フランドランは，『性と歴史』で，「この五百年の間，愛と呼ばれ続けてきたものは，同じ一つの感情だったろうか？[17]」という問題を提起し，16世紀フランス社会における愛と性に関する観念を検討した。また，他の著書の中で，当時の人々が「家族」をどのように理解していたのかを検討した[18]。以上の例から，《アナール》学派の家族史研究は，共通して「家族理念」を主題にしており，また，さらに，「近代的家族観」あるいは「近代的家族理念」への関心も非常に強いことが明かであろう。こうした「近代的家族観」の起源と変遷を追求しようとする問題意識が，《アナール》学派の家族史研究の特徴ともいえよう。言い換えれば，「近代的家族理念」を解明するためには過去の家族観と比較する必要があったのである。

一方，ケンブリッジ・グループの捉え方は，グループ結成のきっかけとなった論文，ラスレットのクレイウォース教区とコックノー教区の研究から読み取ることができる。ラスレットは『ノッティンガムシャー　クレイウォースの牧師の記録』というクレイウォースの教区牧師，ウィリアム・サムソンによって1676年3月27日から1701年3月8日まで毎年つけられた洗礼，結婚，埋葬の記録，1676年と1688年につけられた住民調査の記録から，この村の世帯と家族生活，コミュニティーの社会構造を分析した[19]。その結果，都市ばかりでなく村落でさえ職業が多様であったこと，社会学者によってもっぱら前工業化社会の特徴とされている“拡大家族世帯（extended family households）”はこの村にはほとんど存在せず，総世帯の50%～60%が，夫と妻と子ども達からなる“単純家族世帯（simple family households）”であったこと，また，この村では死別による再婚が多かったこと，3世帯に1世帯は住み込みの奉行人を含んでいたこと，さらに一ケ所に一生定住していたと思われていた過去の人々の人口異動が激しかったこと，この人口異動は奉行人によるものが多かったことなどを解明し，これらを，コックノーとフランスのサン・トメールのデータと比較し，これらのデータの代表性について検討した。ケンブリッジ・グループの特徴，すなわち，常に世帯規模，世帯構成，家族構成という角度からの，伝統的家族の実態へのアプローチがすでにこの研究の中に見いだせる。さらに，最終的な到達点は，そのことに成功しているか，いないかは判断を保留するとしても，社会構造の形態・変化にあることも読み取ることができる。

これまでみてきたように，《アナール》学派とケンブリッジ・グループは，共に，過去の民衆を研究対象とし，彼らの日常生活の変化を記述し，それを現在のわれわれのものと比較することによって，われわれ自身が立っている現在の状況を時期限定性をもつとしても，よ

り深く認識し，われわれが抱えている諸問題の解明に役立たせようとする，こういった共通の立場に立っている。しかし，過去の人々の家族生活へのアプローチの方法は，全く異なる。ケンブリッジ・グループが，家族構成，世帯構造，社会構造の解明を通して，伝統的なイギリスの家族生活の解明を目指すという一貫した考え方をもつのに対して，《アナール》学派は，過去の家族の日常生活の諸相から過去の人々の家族に対する観念，つまり「家族理念」を解明しようとしている。《アナール》学派は，過去の人々が家族として結びついていた，あるいは結びつけられていた「家族理念」，すなわち“心性”の解明を家族史研究の中心的課題としているのである。

III. 家族史研究の資料と分析方法

次に，《アナール》学派とケンブリッジ・グループが，分析の資料として何を使っているのか，そしてその資料をどのような方法で分析しているのかを明らかにしたい。

《アナール》学派の家族史研究には，現存する過去に関するものはすべて，つまり，あらゆる造形物資料と記録資料が用いられている。何故，《アナール》学派は，無反省的にあらゆるものを資料に加えようとする傾向があるのか。その理由は二つあるように思われる。第一は，家族史研究が対象としている人々は，ほとんどが文盲であるから，文献資料の残存を期待することはできない，ということにある。第二は，家族史研究が「家族理念」という非常に抽象的な側面を解明しようとしていることに由来する。つまり，このような抽象的な観念は，定量的なデータでは検証が困難な定性的データの領域である。定性的データの解釈には，研究者の主観が入る可能性がある。この問題を回避するために，資料の幅を広げようとしているのである。

一方，これとは対照的に，ケンブリッジ・グループが用いる資料は，基本的には教区簿冊である。ラスレットが，「単に名前を書きつらねただけの資料ですらも，これを想像力豊かに分析することによって，多くのことをそこから引き出すことが可能である。……(中略)……とりわけ，各世帯の世帯規模がわかるときには，これは有用な資料である[20]」と述べているように，現存していれば『住民身上記録』が最も理想的な資料となる。ケンブリッジ・グループの資料はこのように限定されている。

では，具体的な分析方法を比較検討しよう。《アナール》学派の分析方法の第一の特徴は，フェーヴルの「新しい歴史学」の構想に求められよう。フェーヴルは，「(歴史家の対象である) 事実は決して与えられるものではなく，通常，歴史家によって創造されるもの，言いかえれば仮説と推論の助けを借り，細心の注意を要するそして興味津々たる作業を通じて作り上げられるものなのです」と述べ，その理由として歴史家は研究に際して「……明確な意図，解決すべき問題，検証すべき作業仮説をいつも念頭において出発する[21]」ものだからとする。このように，フェーヴルは，歴史認識における歴史家の主体的役割を強調するとともに，問題を提起し，仮説検証するという科学的営為を「新しい歴史学」に求めたのである。《アナール》学派は，フェーヴルのこの構想に従って家族史研究に着手していると考えられる。具体例をあげておこう。アリエスは「我々が抱いているような『子供期という意識』は中世においては欠如していた[22]」という仮説を図像記述分析によって検証し，セガレーヌは，「農村社会の夫と妻の関係は，夫が妻に，あるいは妻が夫に絶対的な権威でのぞむのではなく，二人が相互補完しあうことで成り立っている」という仮説を提示し，民俗学者の言説の再解釈，さらにこれを補強するための諺・絵画などの分析によって，この仮説を検証した[23]。

第二の特徴は，アリエスを先駆者とする図像画の解釈である。アリエスは，「子供期という意識」を中世の人々が抱いていたかどうかを絵画・版画といった図像画を分析するという方法を用いて解明することに成功した。アリエスがこの方法を用いるまで，《アナール》学派は“心性”史を重視はしていたが，具体的な分析方法を提示することは出来ず，“心性”の問題は宙に浮いていたきらいがある。しかし，アリエスが『〈子供の〉誕生』で具体的な“心性”の分析方法を提示したことによって，“心性”は盛んに研究されるようになった。《アナール》学派の家族史研究は「家族理念」を中心テーマに捉えるという特徴が認められる。この「家族理念」を分析する方法として，このアリエスの図像記述分析が主に利用されているのである。《アナール》学派の家族史研究では，絵画・版画などの図像画から，当時の人々がどのような家に住み，何を着ていたのか，どんな労働をしていたのか，どんな道具を使っていたのかなどを分析していく方法をとる。このように，アリエスの図像記述分析は，「家族理念」の分析に大きく貢献しているが，この分析方法には分析者の主観的解釈を排除しえないという大きな問題が含まれ，批判もここに集中している。

第三の特徴は，資料の解析法にある。この資料解釈法

というのは，絵画・版画などの図像画以外の，日記・書簡・諺・賢者の言説などの資料の解釈のことである。従って，図像画とは異なる種類の資料について記述するのであって，資料から何を読み取るかという資料の意味解釈自体は，第二の特徴の図像記述分析と重なるところが大きい。セガレーヌが「諺は規範を述べているだけで，実情を描いているわけではない[24]」と述べ，諺の新しい解釈を示したような，資料の裏の意味を探るという方法である。つまり，資料に直接表現されている文脈をそのまま史実として受け止めるのではなく，資料に隠されている史実を読み取る方法，あるいは，資料作成者や当時の人々が意識していなかった事実を読み取るという方法である。これは，「家族理念」という抽象的な，人間の主観にかかわる問題を扱うための方法として «アナール» 学派が開発した方法であるが，ここにも難問がある。つまり，証拠資料は，しばしば複数の解釈が成り立つという点である。この問題は，先ほど述べた第二の特徴である図像記述分析にも内在する問題である。しかし，ここで強調しておきたいことは，これまでの家族史研究あるいは家族社会学といった学問分野で，「家族観」「家族理念」は，その重要性は認められながらも科学的な分析方法が見いだせず，印象的な記述の域を脱しきれないために意図的に扱うことが避けられてきた問題であった。この問題を «アナール» 学派の家族史研究者は，ここで述べたような資料解釈法，あるいは図像記述分析法を，数量化分析とならぶ科学的な一方法として位置づけることによって，「家族観」「家族理念」を主題化することに成功しつつある（成功したというにはまだ多くの問題を抱えているので早計である）といえよう。

一方，ケンブリッジ・グループの分析方法の特徴は，数量史的方法にある。ラスレットは，「すべての歴史家は，ある程度，社会と関わっている。たとえ対象が個人であったり，精神状況であったりしてもである。それゆえ，すべての歴史家は，数量とつきあっているのである[25]」と述べている。斉藤修は，ケンブリッジ・グループのメンバー達は，すべてを数量化することが，良い歴史研究だなどと考えているわけではないとし，「彼らが重視するのは，理論や仮説モデルを“データと対決させること”なのである[26]」と述べている。ケンブリッジ・グループは，社会史，家族史が行なってきたような個別事例を積み重ねるという方法は用いず，教区簿冊に基づく定量的データの統計的分析を家族史研究の分析方法に使ったのである。数量的方法とともにケンブリッジ・グループの分析手法の第二の特徴といえるのは，比較法である。これは，ラスレットが，「伝統的なヨーロッパ世帯のユニークさを証明するためには，世界中のあらゆる地域から歴史的資料を収集しなくてはならないであろう[27]」と述べていることからも容易に理解できよう。ラスレットは，世帯 (household) という概念を用いて，時代を通じての，また異なった文化と民族性をもつさまざまな社会を通じての家族構造の研究を行うことを提唱している[28]。ケンブリッジ・グループの分析方法の特徴は，数量的分析と比較法に求められるのである。

IV. 家族変動論の意義と限界

«アナール» 学派は前述した研究成果を背景に，社会学に対して，現在の理解のための歴史研究の有用性を信ぜず，歴史に無関心であり，彼ら自身の現在に対する分析だけから，そして理論上の必要から，研究対象としている現象のはなはだ神話的な歴史を作り上げる[29]，と批判する。ここで批判を受けている社会学の「神話的な歴史」とは，家族変動論を指す。家族変動論は，その関心が，産業化と家族変動に集中しているために，時間の幅を比較的短く取り，家族の形態面と機能面から論じられてきた。

家族の形態面の変動は，W. F. オグバーンと M. A. ニムコフの見解を通説としている。彼らの見解を要約すると，血縁家族 (consanguineous family) は解体し夫婦家族が支配的形態となる。この移行の過渡期に直系家族が現われるが，産業化の高まりとともに直系家族は夫婦家族にとって代えられる。この家族変動の動因はテクノロジー，都市化，産児制限，イデオロギーの相乗効果によるとしながら，その中心はテクノロジーにおかれている[30]。さらに，ニムコフによって独立家族（核家族）は狩猟経済と産業社会に結びつき，拡大家族は農業と結びつくという家族形態と生業形態 (typ of econmy) の関連が述べられた[31]。このような家族変動の捉え方は曖昧で，社会現象の不正確な記述に過ぎない。にもかかわらず，産業化が伝統的な拡大家族制度を崩壊させ，そしてその後に夫婦家族制が成立した，とする考え，換言すれば，夫婦家族は都市的産業革命の機能的帰結であるというのが共通理解である。

次に，機能面の変動について検討する。森岡清美が，「家族形態の変化は，巨視的にみれば，社会の変化，特に社会の産業化に伴って生じた。家族機能の変化は，家族形態の変化によってひき起こされたが，むしろそれ以上に，家族形態の変化をともなった社会の変化そのものによって生じた[32]」と言及しているように，家族社会学

では，家族機能の変化も社会の変化によって生じるものと考えられている。オグバーンの「家族機能縮小論」は，1930年に家族でなされる仕事を調査し，近代以前の家族は〈1〉経済，〈2〉地位付与，〈3〉教育，〈4〉保護，〈5〉宗教，〈6〉娯楽，〈7〉愛情という七つの機能を果たしていた。これらの機能を果たしていたために，近代家族は威信と影響力をもっていた。しかし，近代工業が勃興し，大量生産が可能になり大量消費が実現し，さまざまな専門的な制度体が出現した。経済的機能は工場その他の外的機関に，保護は警察や保険会社などに，娯楽は国家や民間産業が提供する娯楽施設に，教育は学校にというように家族外の諸機関に移行するか，あるいは機能自体が衰退してしまった。ただ，愛情というパーソナリティ機能だけは維持され，この機能の相対的な重要性はかえって高まったという[33]。このパーソナリティ機能への収斂に関しては，その後，E.W.バージェスによって積極的解釈が行われた。彼は，オグバーンの資料に依拠しながら，家族は外部的伝統的機能を失い，子どもを養育し，愛情を授受し，パーソナリティと発達を支える機能に専門化してきたと説き，これを「家族員たちにかかってくる社会的圧力だけによって結合が決定されるような」制度的 (institutional) 家族から「その家族の行動がメンバー相互の愛情と同意……(中略)……夫婦親子の密接な共同から生じてくる」友愛的 (companionship) 家族への移行の一面として捉えた[34]。

T.パーソンズの「核家族化論」に移ろう。G.P.マードックの核家族普遍論を継承したパーソンズは，社会の構造・機能的分化にともなって核家族が親族システムの中で孤立することを強調した。この核家族には，「子どもが真に自分の生まれついた社会のメンバーとなれるよう行なわれる基礎的な社会化」の機能，そして「成人のパーソナリティの安定化」の機能が基本的かつこれ以上減らすことができないものとして残る，と主張する。親族から孤立した核家族は，互いに自由に選択したパートナーとの結合としての結婚を基盤にして築かれ，社会の下部システムとしての家族を維持するために合理性と有効性という価値を追求して男女両性がそれぞれに役割を分担する。夫＝父親は，外部への適応と課題遂行にかかわる手段的役割 (instrumental role) を，妻＝母親は，集団の維持と成員の統合にかかわる表出的役割 (expressive role) を引き受けていると論じる[35]。

この三者に共通する見方は，家族の機能は，産業化によって縮小され，パーソナリティ機能だけが残ったということになろう。換言すれば，パーソナリティ機能は家族の普遍的，基本的機能であるということになる。

1960年代前半，これらの通説に対して，家族社会学の研究者から異説が提示される。S.M.グリンフィールドは，近代日本の直系家族やフランス系カナダ人の都市家族を例に，都市化と産業化は小核家族 (small nuclear family) 化と親類の断片化をともなうことなしに出現したこと，カリビア海のバーバドス島を例に，都市社会・産業社会でなくても小核家族が存在することを指摘し，産業化と家族規模の縮小とは相関するという命題は一般論として成立しないことを明らかにしている[36]。また，W.J.グードは，過去50年間のヨーロッパ・インド・アラブ諸国・中国・日本における家族変動を研究し，家族の変化は「すべてなんらかのかたちで夫婦家族の方向をたどる」が，従来言われてきたような産業化によって夫婦家族が生み出されるという単純な関係ではないことを主張する。彼は，夫婦家族制のイデオロギーという理念的変数の独立的作用を指摘し，拡大家族形態をとる社会に，産業化の開始に先立って夫婦家族制のイデオロギーが導入され，大部分の人々は，これを受容しないけれど，社会的に恵まれない人々・若者・婦人・教育を受けた人々は共感する。この新しいイデオロギーは，そこに描かれた新しい可能性を実現する経済的基礎が据えられないあいだは，夫婦家族を実際に生み出す効果はないが，産業化が開始されて伝統的な家族形態を夫婦家族に変える圧力が働きだすと，その変化を促進したと主張する[37]。しかし，これらの批判は，家族社会学の中では，一般に受け入れられることはなかった。従来の諸説が自明視され，神話と化していったのである。

ところが，現在，これらの神話は，《アナール》学派とケンブリッジ・グループから新たな挑戦を受けている。家族の形態面の変動に関する神話は，ラスレットの産業化に関わりなく過去のイングランドの世帯は，一世帯あたりの世帯人数を4.75人とする単純家族世帯であったという論証[38]，さらに《アナール》学派の A.コロンの以下の指摘によって否定される。コロンは，18世紀のオート＝プロヴァンス地方の結婚契約書の分析から，数世代の家族が家長の権威の下に共住する多核家族世帯あるいは拡大家族世帯がこの地域では広範に存在したことを明らかにし，家族形態の地域的多様性を指摘した[39]。このような反証により，もはや産業化のみが家族を変貌させる要因であると主張することは不可能になり，産業化と家族規模の関係には複雑で多様なケースがありうることを家族社会学は認識せざるをえなくなった。ここに，家族社会学の一つの神話が崩壊しつつある。

また，家族の機能面の変動に関する通説も，《アナール》学派の家族史研究の諸成果によって再検討が促されている。《アナール》学派は，既存の家族研究ではその重要性に気づきながらも扱い得なかった「家族観」あるいは「家族理念」という研究領域の重要性を説き，批判を受けながらも検証可能な研究分野にした。つまり，これまでの家族社会学の研究は，科学の一分野たりうるために，印象的記述に堕ちうる人間の主観的な部分には触れずに，家族の構造・相続など研究者が客観的に検証できる問題だけを扱ってきたのであるが，《アナール》学派の“心性”の研究方法を用いることによって過去の人々の「家族観」といった人間の主観の部分の検証が可能になったのである。これが，《アナール》学派の家族史研究の最大の成果といえよう。

さて，前述したように，アリエスは，この「家族観」という“心性”研究を図像記述分析を駆使し，「夫婦の間，親子の間での感情は，家族の生活にとっても，その均衡のためにも，必要なものとされていたのではなかった[40]」ことを検証した。さらに，フランドランとセガレーヌは，この論証を補強し，夫は外で働き，妻は家事・育児に専念し，夫婦・親子は深い愛情で結ばれているという「家族観」は，普遍的な観念ではなく，たかだか200年程度の歴史しかもっていない観念であることを明らかにした。これらの「家族観」あるいは「家族理念」の研究により，パーソナリティ機能は，家族に普遍的な機能ではなく「近代家族」に特有な機能であることが判明した。従って，パーソナリティ機能普遍説は，否定され，この研究は，「近代家族」の機能的特徴の研究に相対化されたといえよう。これによって，家族社会学は，一挙に「普遍的な家族に関する学問」から「近代家族を扱う学問」へとその研究範囲も狭められつつある。ここでもまた，家族社会学の神話が崩壊しようとしているのである。

V. 結びにかえて

家族社会学は，類型化や定義の構築に力を注ぐあまり家族の歴史的分析を軽視した。その結果，家族の実態とはかけ離れた神話を作ってしまったのである。“家族の危機”が叫ばれている現在，家族の状況を検討するにあたっても，過去との比較が重要なのではないだろうか。他の社会現象の歴史的研究と比べ，家族の歴史的究明に関する研究が立ち遅れていることに対し，江守五夫は「家族が著しく変貌し，数々の問題を投げかけている現代の家族状況を客観的に認識するうえでも，重大な障害をなしている[41]」と述べている。家族の歴史的研究の見直しは，1980年『家族史研究』の発刊となり，家族社会学の研究者の注目するところとなった。家族社会学は，過去を放棄してはならないのである。

では，家族社会学の神話が崩壊しつつある現在，《アナール》学派の提言を踏まえた上で，家族社会学にはいかなる新しい課題が課せられるのであろうか。もとより《アナール》学派の方法に対してもいくつかの批判がある。批判の中心は，M.アンダーソンが，「あるひとつの証拠事実については，しばしば複数の解釈が成り立ちうる」と述べているように資料の解釈の多義性にある。アンダーソンは続けて，次のように述べている。一般民衆の感情に注意が向けられるようになるや否や，資料源をどうするかという問題はほとんど克服不可能な難問であることが明らかとなった。なぜなら，今日まで使用され続けてきた主要な資料を提供したその時代の地方の医者，少数の官僚たち，民族誌学者たち，民俗学者たちの主張の信頼性について，曖昧さがあるからである。このようなランダムな情報の寄せ集めの中から，一貫性のある状況把握をしようとするいかなる試みも，あやふやなものになり，時には想像力の飛躍をもたらすに違いない[42]。この批判は，アリエス以来の図像記述分析，資料の解釈の最も弱い点を指摘している。この問題は，統計処理が不可能なものを扱うすべての研究分野が抱える欠点であるといえよう。

これからの研究方法としては，ケンブリッジ・グループが行っている数量的データと《アナール》学派が行なっている定性的データを統一的に把握することが必要であろう。しかし，前述したように過去にかかわる資料には限界があり両者を結び付けるには困難が伴う。そこで，セガレーヌや『家族史研究』の創刊グループが提唱しているように，家族研究を既存の学問の枠を越え，社会学，人類学，歴史人口学などの学際的な領域に位置づけ，包括的，総合的に研究を進めていかなければならないだろう。家族という研究対象は，従来の研究が行なってきたような家族のある一面を照らし出すだけでは，片手落ちになってしまうのである。どちらにしても，セガレーヌの言葉を借りれば，家族研究は「一般化した理論を提示する時期ではない[43]」のである。

註

1) 森岡清美・望月嵩共著,『新しい家族社会学』, 培風館, 1987年, P. 3.
2) Ariès, Ph., "L'enfant et la vie familiale sous l'ancien régime", Seuil, 1960,『〈子供〉の誕生 アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信・恵美子訳, みすず書房, 1973, P. 384.
3) ibid., 訳書, P. 386.
4) "Cambridge Group for the History of Population and Social Structure" は, 1964年 P. ラスレットと E. A. リグリィによって結成された歴史人口学の研究集団。ケンブリッジ・グループは,《アナール》学派と同時期に家族史研究に着手し, 家族社会学に大きな影響を与えている。歴史人口学は, 歴史家の認識上の資格を変えさえしたと, フランドランが述べていることからも分かるように,《アナール》学派とケンブリッジ・グループは密接な関係を保っている。
5) Febvre, L., "Combats pour l'histoire", Armand Colin, 1965,『歴史のための闘い』長谷川輝男訳, 創文社, 1977, P. 28.
6) Shorter, E., "The making of the Modern Family", Basic Books, 1975,『近代家族の形成』田中俊宏・他訳, 昭和堂, 1987, P. 10.
7) 斉藤修編著,『家族と人口の歴史社会学 ケンブリッジ・グループの成果』, リブロポート, 1988. P. 10.
8) Laslett, P., "The World We Have Lost: further explored", Curtis Brown Ltd., 1965,『われら失いし世界』川北稔・他訳, 三嶺書房, 1986, P. 383.
9) 斉藤 修, 前掲書, P. 14.
10) Braudel, F., 'La démographie et les dimensions des sciences l'homme' in Annales E. S. C. 1960, P. 493 を参照。
11) Ariès, Ph., 前掲書, "Centuries of Chidhood", Baldick, R. 訳, Random House 1962, PP. 9-10.
12) Ariès, Ph., 'L'histoire des Mentaliès' in Le Goff., dir., "La nouvelle histoire", Retz, 1978, PP. 9-10.
13) Stone, L., "The Family, sex and marriage in England, 1500-1800" Harper & Row, 1977. Le Roy Ladurie, E., 'Sysème de la contume. Strctures familiales et coutumes d'hèritage en France au XVIe siècle' in Annales E. S. C. no 4-5, 1972, Burguière, A., 'Le rituel du mariage en France: pratiques ecclésiastiques et pratiques populaires (XVIe-XVIIIe siècle)' in Annales E. S. C., no 4-5, 1978 を参照。
14) Shorter, E., 1975, 訳書 P. 9.
15) Babinter, E., "L'amour en Plus", Flammarion, 1980,『プラス・ラブ』鈴木晶訳, サンリオ, 1981, PP. 14-15.
16) Segalen, M., "Mari et femme dans la société paysanne", Flammarion, 1980,『妻と夫の社会史』, 片岡幸彦・陽子訳, 新評論, 1983.
17) Flandrin, J-L., 1981, 訳書 P. 12.
18) ———, "Famillies Parnté maison, sexualité dans l'ancienne société", SEUIL, 1984, 第1章参照。
19) Laslett, P., 'Clayworth and Cogenhoe' in "Family life and illicit love in earlier generations", Cambridge University Press, 1977,『家族と人口の歴史社会学』斉藤修編著, リブロポート, 1988, PP. 57-136.
20) ibd., 訳書 P. 70.
21) Febvre, L., 1965, 訳書 PP. 9-10.
22) Ariès, Ph., 1960, 訳書 PP. 1-5.
23) Segalen, M., 1980, 訳書 P. 21.
24) ibid., P. 194.
25) 斉藤 修, 前掲書 P. 14.
26) ibid., P. 15.
27) Laslett, P., "The European household and its history as viewed from Japan" 1988,『家族と人口の歴史社会学』斉藤修編著, リブロポート, 1988, P. 27.
28) Laslett, P. and R. Wall, eds., "Household and family in past time", Cambridge, 1972.
29) Flandrin, J-L., 1981, 訳書 P. 370.
30) Ogburn, W. F. and Nimkoff, M. F., "Technology and the Changing Family", Houghton Mifflin, 1955, Chap. 11. 参照。
31) Nimkoff, M. F. and Middleton, R., "Types of Family and Type of Economy" in American Journal of Socielogy 66: 3, 1960.
32) 森岡清美・望月嵩共著, 前掲書 P. 192.
33) Ogburn, WF., 'The Changing Family' in Publications of American Sociological Society 23, 1929, 'The Changing Family, in The Family 19, 1938.
34) Burgess, E.W. and Locke, H.J.. "The Family: from institution to Companionship", Amercan Book, 1953, PP. 26-27.
35) Persons, T. and Bales, R. F., "Family Socialzation and interaction process", Routledges & Kegan Paul 1955,『家族』橋爪貞雄・他訳, 黎明書房, 1976, PP. 34-59.
36) Greenfield, S. M., 'Industrialization and the Family in Sociological Theory, in American Journal of Sociology 67: 3, 1961, PP. 316-317.
37) Goode, W. J., "The Family", Prentice-Hall. Inc., 1964,『家族』松原治郎・他訳, 至誠社, 1976, PP. 196-197.
38) Laslett, P., 1988, 訳書 P. 30.
39) Collomp, A., 'Famille nucléaire et famille élargie en Haute-Provence au XVIIIe siècle' in Annales E. S. C. no 4-5, 1972,『家の歴史社会学』二宮宏之・他訳, 新評論, 1983.
40) Ariès, Ph., 1960, 訳書 p. 2.

41) 家族史研究編集委員会編,『家族史研究 1』, 大月書店, 1980, P.3.
42) Andrson, M., "Approaches to the History of the Western Family 1500-1914", Macmilian Press, 1980,『家族の構造・機能・感情』北本正章訳, 海鳴社, 1988, PP. 55-56.
43) Segalen, M., "Sociologie de la famille", Armand Colin, 1981,『家族の歴史人口学』片岡陽子・他訳, 新評論, 1987, P.9.